

なはず處であらう。噫それにしてもその溫容に面り接することの出来ないのは、悲しみの極みである。

(支那學第七卷第三號、昭和九年七月)

桑原博士「東洋文明史論叢」序

桑原博士の館を捐てられて以來早くも三歳餘、その遺書第二篇が東洋文明史論叢と題してこゝに發刊せられることになつた。收むる所總て十三篇、みな曾て専門學術雜誌を飾つた名篇であるが、更たためて新裝して世に遺られるのを見ると、今更に博士在世の昔の憶ひ出でられ、追慕の情に堪へぬ。

凡そ述作についての博士の態度は實に眞摯熱心を極め、従つてその論斷は山の如き鐵案であり、若しくは問題の考究に數歩を進めたものであると、敢て自から認めて公言せられ、一篇成るごとに同學との談は必ずその成果苦心に終始し、意氣當る可からざる慨あるのが常であつた。かく精神を込め、自から任せられた論述の上に現はれて居る博士の學風は、實に堅實そのものとも言ふべく、廣汎な知識によつて蒐めた史料について、一々精緻なる考證を施し、金城鐵壁の論據に立つて、新しい透徹した論斷を下されるのが尤も長所であつた。もとより史學の研究に於ては、證據固めのみに踞踏しては、當然固陋の弊に陥らねばならず、證據の及ばざる處に用ゐらるべき洞察の明が多分に要求せられるのであるが、博士はこの點に於てもまた遺憾なくその明敏を發揮せられた。かくて兩種の立場か